



中部の

# エネルギーを 築いた



## 遠三電気を創業し北遠・東三地域に電灯を灯した 三輪貫之助と大石勝太郎

北遠の佐久間村、浦川村、山香村3ヶ村(現浜松市)と東三河の山吉田、八名村、舟着村、長篠村4ヶ村(現新城市)に初めて電気をともしたのは遠三電気である。遠州北部と東三河に跨がる地域に供給する電気会社ということで、遠三電気と名付けられた。都会地から離れ、交通も不便な山間地に電灯事業を起こすのは、様々な困難があったが、浦川村村長の三輪貫之助と浜川村の名望家大石勝太郎らの尽力によって実現した。以下、二人の人物と電灯事業創設の取り組みを紹介する。

### 三輪貫之助 浦川村の名望家



三輪貫之助  
(佐久間町教育委員会  
『郷土の発展につくした人々』)

三輪貫之助は(1868～1926)、浦川の医師、三輪見龍の長男として、明治元年8月に生まれた。同14年、旧安間村(現浜松市)の静修学舎に漢学を学び、その後家業を継ぐため同19年東京済生学舎で医学を学び、同21年に徴兵を受け豊橋歩兵第18連隊に入隊、同25年に除隊後は県立愛知医学校へ入学した。日清戦争の勃発で再び応召、明治28年に帰国したが、父が健康を害していたので(同29年没)、学業を諦め村に戻った。村の名家出身の貫之助は、学務委員や村会議員(明治31年4月)に選ばれ、同32年6月には浦川銀行監査役、同34年2月には村長(第6代)に就任した。以後、逝去するまでに4回、延8年余に亘り村長職を務めた。村長時代の事績としては、漁業組合の設立(明治36年)、浦川大火後の復旧活動(大正元年)浦川小学校の増築(大正14年)

などがあげられる。大正15年10月、58歳で逝去した。(伊東名書『浦川風土記』平成25年、参照)

三輪の事績の一つに遠三電気の設立がある。佐久間・浦川地域には王子製紙(中部工場)や古河鉱業(久根鉱山)が進出し、工場内では電気が使われていたが、村内の一般家庭に電気の恩恵は及ばなかった。三輪は村に電灯を灯したいと奔走したが、資金調達が難しく、また、村人からも「電気は人の体がしびれる危ないもんだというが、家の中に引いても大丈夫かね」と尋ねられるほどであった。この時、三輪に力を貸し、事業のパートナーとなったのが鎮玉村浜川の名望家大石勝太郎であった。



浦川出張所(『中央電力株式会社  
解散記念写真帳』昭和17年3月)

## 大石勝太郎 渋川地区の発展に取り組む



大石勝太郎  
 (静岡県『静岡県徳行録』  
 昭和16年)

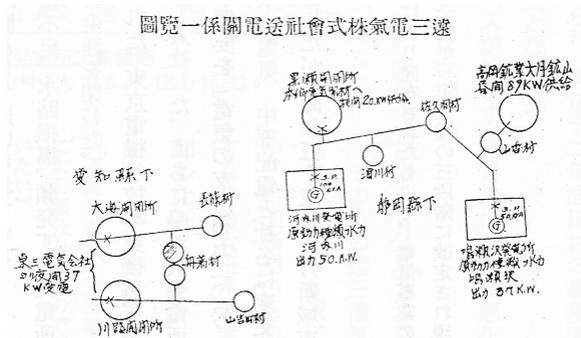
大石勝太郎(1865~1930?)は、引佐郡鎮玉村渋川に、慶応元年8月、大石喜三郎の長男として生まれた。父喜三郎は公共心の篤い人物で、村の林業発展のため、私財5700万円を投じ渋川・気賀間に林道(北三街道)を建設した。勝太郎も、父の感化を受けて村の発展に尽くし、数々の事業に取り組んだ。明治23年に渋川郵便局長となり、村に金融機関のないことを憂い同31年2月に鎮玉銀行を設立、数年後には愛知県の山吉田村(現新城市)に支店を設けた。父の開発した北三街道の県道編入を陳情してこれを実現し、明治34年には御料林の払い下げを受けて村の共有林とした。また、日露戦争後の明治39年、村には多くの従軍者がいたので有志を募り、

村内の六所神社参道に、日清日露の戦勝を記念した凱旋記念門を建設した。現在は国の登録有形文化財に指定されている。この六所神社境内には、大石父子に関わる記念碑が2つ建立されている。1つは父喜三郎の関係した「渋川新道碑」(明治29年2月建立)、もう1つは昭和6年11月建立の勝太郎の頌徳碑である。

大石勝太郎は、村の近代化を図るため電灯事業にも取り組んだ。村内で渋川製材所を経営していた中川悦治郎とはかり、大正元年に製材用水車を発電用に改修して渋川電灯所を開設(製板蒸気汽缶併用)し、僅か1.9kWの発電所であったが村民からは大変喜ばれた。愛知県側の山吉田村に鎮玉銀行の支店があったことも要因となり、愛知県山吉田、八名村、舟着村、長篠村を供給区域とする黄柳川電気を目論み、黄柳川を利用する水力発電所(50kW)を計画した。発生電力の一部は渋川に送る計画であった。詳細は不明だが、この発電計画は実現せず、三輪貫之助が計画していた電気事業に合流し、遠三電気設立へと方向転換した。遠三電気は、大正3年4月に許可(大正元年3月申請)を受け、同5年7月に開業している。同社は、まず愛知県東三河の4ヶ村で、新城周辺で電気を供給していた東三電気(明治44年2月設立)からの受電によって開業した。



凱旋記念門(静岡県観光部  
 『静岡県のすごい産業遺産Ⅱ』平成23年)



遠三電気系統図(『電気之友』520号 大正10年6月)

## 鳴瀬沢発電所と河内川発電所

一方、北遠地域では、山香村に鳴瀬沢発電所(37kW)、浦川村に河内川発電所(50kW)の計画が進められた。2つの発電所は、大正5年10月に水利使用許可を受け、鳴瀬沢発電所は同7年4月、河内川発電所は同9年12月に運転を開始した。鳴瀬沢発電所は主に、高田鉱業大月鉱山や本郷電気製材に電力を供給していたが、第1次大戦後の不況で大月鉱山が閉山した。このため経営困難となり、大正15年11月、渋川電灯所とともに、東三電気に合併された。遠三電気の社長は三輪貫之助、大石勝太郎や八名郡の中島喜助等が交替で就任していたが、三輪も大石も合併されるまで取締役として事業に関わった。

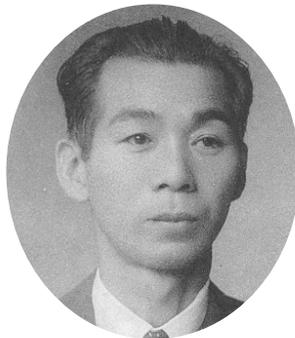


北遠地域の発電所位置図  
(芳賀信男『東三河地方電気事業沿革史』平成13年12月)



河内川発電所  
(前掲『中央電力株式会社解散記念写真帳』)

鳴瀬沢発電所、河内川発電所の建設を担当したのは技師丹学文(1895~1978)であった。丹は、神官を父とし、明治25年1月に、茨城県豊浦町に生まれた。東京電機学校を卒業後、大正4年に遠三電気・渋川電灯所の主任技師となった。その後、東三電気、三河水力電気、中央水力電気を経て中部配電に移り、昭和25年中部配電豊川営業所長を最後に退職、昭和53年新城市で没している。



丹 学文  
(前掲『中央電力株式会社解散記念写真帳』)

友 之 電 氣

日一月六年十正大

遠三電気株式会社河内川発電所  
工事概要

主任技師 丹 学文

一、発電所位置及名稱 名稱 河内川発電所、位置 静岡  
縣田原郡浦川村浦川字橋の本一千八百〇三高地

二、発電工事

(一) 発電機 一臺(七〇瓩の額定容量)

(二) 原動力工事 甲、水力工事

(三) 使用河川名 河内川

(四) 使用流量 許可流量 毎秒二五立方尺、水車一臺の  
要水量 毎秒二五立方尺

(五) 落差 取入口水車軸間の高落差 三三三三尺五寸、有効落  
差 三三三三尺

(六) 水路

堰堤 堰堤は天端四尺上流側法五分法高平均六尺とし右岸  
尾す部分には左の凸岩盤を平面に切取を爲す後下流側は  
一分五分法高平均拾壹尺とし左岸岩盤凸處を切取し水即ち  
し該岩盤に直射を爲し堰堤を爲す、堰堤には洪水の  
に備ふる爲め堰口幅四尺深三尺を設け平時は厚一寸板を以  
て阻止し角落用とす、堰堤の全長は五拾尺にして表面は面尺担  
貳寸以上割石層積とし内面には玉石入路積土を先填す

「遠三電気河内川発電所工事概要」  
(前掲『電気之友』520号)

(浅野 伸一)